「アクティブ・ラーニング」で協働的・互恵的な子どもが育つ学級経営
～「つながる」関係の基盤作りと「振り返り」の充実で汎用的能力を高める実践を通して～

会津若松市立鶴城小学校　教諭　岩本　宏幸

1　研究の趣旨

次期学習指導要領では、未来の創り手となるために必要な「資質・能力」を確実に備えることのできる学校教育を実現することが求められている（第 109 回中央教育審議会）。そのための授業改善の鍵となる視点として示された、主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」以下 AL）への転換が喫緊の課題である。しかし、こうした学びの実現には、学び合う仲間集団における親和的な学級の風土が欠かせない。

本研究では、こうした親和的関係を育てる必要感の高い学級において、AL を支える「基盤」をつくる取組と「振り返り」の充実を通し「人間関係調整力」「自己内省力」を高め合う学級経営のあり方を検討し、個や集団の変容について考察した。

「学級」という「社会の縮図」の中で、仲間と関わりながら学びを深める経験や力が十分でない個人・集団において、
① 「つながる」関係の基盤作り
② 学びを可視化し「振り返り」、学ぶ意味や価値の共有
を図れば、「人間関係形成力」「自己内省力」が高まり、協働的・互恵的に学び合う個人・集団が育つであろう。

2　研究の概要

学級経営において最も重要な一学期において、①「『つながる』関係の基盤つくり」、②「学びを可視化して『振り返り』学ぶ意味や価値を共有する」の二つの視点から「人間関係形成力」と「自己内省力」を高める研究実践をすすめた。

(1) ①に係る手立て
- ア　学級目標（理念）の設定と共有
- イ　「つながるタイム」の実施
- ウ　「つながる」教室空間の設計
- エ　対話的で「有能な聴き手」の育成

(2) ②に係る手立て
- ア　「書く」ことで自分を見つめる支援
- イ　「学び処」から主体的に学ぶ支援
- ウ　学びの過程や成果を可視化する支援
- エ　仲間から自己を見つめ直す支援

3　成果と今後の課題

(1) 研究の成果

一学期の学級経営において、AL を手がかりに、学級の「基盤つくり」をすすめたことで学級集団に「安心感」・「信頼感」が育ち、仲間と協働し深い学びを創るとともに、仲間に期待され貢献することを励みに全力で自分を生かす姿が表出した。（人間関係形成力の高まり）

また、自他の学びや生活を振り返り見つめ直すことで、互いのよさや変容が実感できた。自他の学びを深めるために、自立した学び手として成長すること、支え合って学び合うことで仲間に貢献することの意味や価値に気付き、「自己存在感」・「自己有用感」を高めた。（自己内省力の高まり）

これらの取組を通して共に学び在る仲間への信頼や感謝が芽生え、協働的・互恵的な集団が育った。

(2) 今後の課題

高まった資質・能力が存分に発揮できる、新たな学びの場を意図的・計画的に整備する。